

ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡♡♡

「はぁ♡美春のきつきつマンコ、たまんねえ♡俺のちんぽ、いっぱいもぐもぐしててかぁいいなあ♡」

ぶちゅんぶちゅんぶちゅんぶちゅんッ♡♡♡♡

「もうやめてよぉ…。」

美春は自分のベッドで布団を頭から被り、情けない声を上げた。けれど、そんな細かい抗議が隣人に聞こえるはずもなく、激しいエッチの音が聞こえ続けている。

このアパートは壁が薄いせいで生活音さえ筒抜けになるので、夜中にはなおさら音や声が響いてくるのだ。そしてこの卑猥な音は美春がここに引っ越してからほぼ毎晩続いている。

「んう…やだぁ…いやなのにい…っ♡♡」

布団越しでも聞こえてくるばちゅんばちゅん♡♡と隣人が腰をまんこに打ち付ける音に、顔が真っ赤になって呼吸が荒くなる。ドロリ♡と自分のまんこから愛液が漏れ出てくる感触がして、恥ずかしくてたまらない。

「ばかぁ…椿さんのばかぁ…」

火照る体を持て余しながら、美春は迷惑な隣人に悪態を付き続けた。

美春が椿に会ったのは半年前。このアパートに引っ越してきた時だ。

「ん？新しい人？」

「あ、はい。305号室に今日から入居することになりました。天城美春です。よろしく願います。」

引っ越し業者とともに部屋に荷物を運んでいると、くたくたの白いシャツに灰色のスエット、履き古したスリッパ姿のとんでもなく顔の整った男

がコンビニの袋を持って隣の部屋に帰ってきた。

（うわぁ：顔はいいけど怖そう。）

椿への第一印象はこうだった。ダルそうにふわあとあくびをする大きな口。肩あたりまである黒髪に、気だるげな切れ長の瞳で太い首筋にはタトゥーが入っている。体も大きく、自分より30センチ以上は大きい。

「：ふう〜ん。どんな子が来るのかなぁなんて思ってたけど、こんな可愛いおチビちゃんだったなんてね。」

「お、おチビちゃん！？」

27歳の成人女性に使うような言葉ではない。美春が赤くなって顔を顰めると、椿はにっこり笑ってタバコの火を消した。

「俺は304号室の吾妻椿。よろしく〜。」

ひらひらと手を振って自分の部屋に入って行った椿の背中を、美春はキ

ツと睨みつける。

（怖そうな人だし失礼だし、あんまり関わらないようにしようっと。）

もう男はこりごりなのだ。荷物を運んでくれた業者を見送って、今日から住む新しい部屋に戻る。

「…随分小さい部屋になったなあ。」

まだ段ボールも開けていない年季の入った畳の部屋で呟く。

3か月前までは人生の絶頂期だった。婚約者と一緒に高いマンションで同棲していて、自分も大手企業の課長補佐としてバリバリ頑張っていた。年上で課長である婚約者とは公私ともに仲も良く、結婚も決まっていた。

そんな婚約者は新入社員の可愛くて胸の大きい女に寝取られた。

いつのまにか、自分が新入社員に嫌がらせをしていたことになっていて、二人で買ったはずのマンションは追い出された。新入社員へのパワハラへの

和解金として貯金も半分ほど取られ、会社からも部署移動という名の退職勧告があり、何もかも嫌になつて辞表を叩きつけた。少しだけばつの悪そうな婚約者とニヤニヤ笑っている新しい彼女に何も言わずに部屋を出てきたのだ。

「この年でまた一からやり直しかあ…。」

古ぼけた畳に大の字になり、グンと体を伸ばす

「やるしかないよね…。でも少しくらいゆつくりしたい。

ずっと頑張ってきた。でももう頑張れないかもしれない。

「…とりあえず何か買いに行こう。」

女性にはきちんとして欲しいという婚約者の希望を叶えるため、家でもブラウスにスカートというオフィスカジュアルな格好を崩さなかった。けれども縛られる必要もない。段ボールを開け、ずっとクローゼットにしま

ってあったパーカーとジーンズを取り出し、身に着ける。

「うわぁ…楽だ。」

まだ傷ついた心は癒えていないけれど、少しだけ体が軽くなったような気がする。

「今日はカップラーメンにしちやおう。」

スマートフォンだけを持って立ち上がり、スリッパを履いて外に出る。するとそれと同時に隣の部屋の扉が開いて、気だるそうにあくびをした椿と「今度またお店に来てね♡」と可愛らしくおねだりする水商売らしき胸の大きい女の子が出てきた。

「あ…。」

美春が思わず声を上げると、椿と女の子がこちらに視線を向けてくる。

「あれ…？おチビちゃんじゃん。こんな夜中にお出かけ？」

へらへらと笑いながら椿がこちらに近付いてくる。すると、可愛い女の子はけん制するようにキツと美春を睨みつけて、椿の腕にぎゅうつと抱き着いた。

「ちよつと椿さあん、この年増だあれ？」

「っ！」

いきなり年増扱いされた美春はピキツと苛立つが、何とかそれを押し殺してニコリと笑う。

「こんばんは、私はただの隣人です。それでは。」

「ちよつと待つてよ、おチビちゃん。コンビニでも行くの？夜中に一人なんて危ないから俺もついて行ってあげる。」

「結構です。」

スタスタと歩いて二人の横を通り過ぎようとすると、女の子がクスクス

と笑い始めた。

「クール気取ってて痛いおばさん♡欲求不満になってうちの椿さんにちょっかい出さないでよ?…まあ、そんなおばさんじゃ椿さんもちんぽ勃たないかあ。」

女の子の言葉が、婚約者の浮気現場で言われた言葉と重なる。

『え、だって先輩は美春さんのこともうおばさんで抱きたくないって言うてましたよ? いますぐ別れたいって』

『美春じゃ勃起しないって♡』

(どいつもこいつもお!!!!!!)

怒りが頂点に達した美春は女の子を突き飛ばすと、椿の胸元を引っ張って無理やりキスした。

「んむ!?」



「んう…椿…んちゅ…んむう♡…椿い♡♡」

「っ!?!」

椿が目を見張って甘い声を上げながらキスしてくる美春を見つめる。くちゅくちゅ♡と舌を絡めて、いじらしく椿の唾液を飲み込む美春の体を椿が抱き寄せようとした時。

「っ! 勃起してるじゃん、あんたの男! アラサーおばさんに寝取られて恥ずかしくないの、小娘!」

「なっ!!!」

確かに椿のちんぽは着古したスエットを押し上げていて、服の上からでも分かるその大きさに、美春はゾツとしてしまう。

「馬鹿にしないでよね! これに懲りたら二度と関わってこないで! 自意識過剰のバカカップル!!」

そう言い切ると、美春はダッシュでその場から逃げ出した。

「ふざけるなババア！」

後ろから女の子の怒声が聞こえてきて、美春はクスクスと笑う。

（そうだ。こうやって言ってやれば良かったんだ。）

あの時、何も言わずに大人しく了承してしまったのは間違いだった。もつとちゃんと怒れば良かったのだ。

——あの二人にはちょっと悪かったけれど、おかげで少しでも元気が出てきたかも。

「ふふ！私の人生、今日から始まったのかも！」

大学を出て、企業に勤め、真面目に生きてきた人生だった。少しくらい羽目を外しても、罰は当たらないだろうと、美春はニコニコ顔でコンビニへ急いだ。

「カップラーメンと…、お酒も買おう！チョコレートもいいなあ…よし！  
アイスも！」

いっぱいになった袋を持って、美春ニコニコ笑いながら帰る。しかし、  
どんどんアパートが近くなるにつれ、不安になってきた。

「…さっきの人たち、まだいたらどうしよう。」

あの時はハイになっていたが、今になって自分がやらかしたことを思い  
出し、血の気が引いてくる。引っ越し初日に隣人とトラブルを起こすなんて、  
今までの自分なら考えられないことだった。

「どうしようー！」

ピタリと足が止まってしまふ。けれど、帰る家はある。あそこしかない。美春は  
恐る恐る古びた階段を登り、樁たちがいないか確認した。

「あ、いない…。」

ほっと溜息を吐いた美春は、ダッシュで自分の部屋の前に行くと、急いで部屋に入り鍵をかけた。

（お隣さんと鉢合わせしないように、これからは十分注意して出かけることにしよう…）

幸か不幸か、仕事は辞めてしまっているの、毎朝決まった時間に出ていく必要もない。中途半端な時間帯に出かければ、そうそう会うこともないだろう。そう思いながら、コンビニで買ってきたものを広げ、一人パーティーに興じることにした。

「ふふ。そろそろ寝ようかなあ…。」

久しぶりにお酒をたっぷり飲んで上機嫌な美春は電気を消してベッドに

潜り込む。引越し疲れもあつてか、すぐに睡魔が襲つてきて、眠りに落ちようとした時。

「ああん♡椿い♡椿い♡きもち♡きもちいい♡」

ぼちゅん♡♡♡ぼちゅばちゅばちゅばちゅばちゅ♡♡♡

「は？」

隣の部屋から卑猥な声と水音が聞こえてきた。

「やああん♡うしよ、しよこだめえ♡イクイクイクう♡

ぶちゅん♡♡♡ぶちゅん♡♡♡ぶちゅん♡♡♡ぶちゅん♡♡♡

「はは♡美春のおまんこ、俺のちんぽずっぽり咥え込んでるじゃねーか。恥ずかしくねーの？なあ、まんこから涎ダラダラこぼしやがって。あとで、自分で舐めとれよ！」

ぼちゅん♡♡♡ぼちゅばちゅばちゅばちゅばちゅ♡♡♡

「イクイク、嬉しい♡♡」

「…は？美春？」

自分の名前を呼ばれた美春は顔を真っ赤にして声が聞こえる方の壁を見る。

「おら！中に出すからおまんこでしっかりゴクゴクしろよ美春♡」

「いくぅ♡嬉しい！！」

「ひっ！」

男女の激しいセックス音に、美春は怯えたようにベッドで丸くなる。ガタガタと激しい音がした後、やっと隣からの卑猥な声は止んだ。

「な、何よ…。も、もしかして仕返してこと…？」

自分のようなおばさんにキスをされたことが、よっぽど悔しかったのだろうか。

「ううう、私も悪かったけどお…。」

じんわりと美春の瞳に涙が滲む。めそめそと涙をこぼしながら、美春はベツドで泣きながら眠りについた。

\* \* \* \* \*

その後、できるだけ椿と会わないように生活時間をずらした美春だったが、夜中になると必ず激しいセックスの音が聞こえるようになった。女性の声が聞こえたのは初日だけで、それ以降は椿の声と腰を叩きつける卑猥な水音しか聞こえてこない。

「おら、おまんこお漏らしするまで舐め舐めしてやるから自分で広げて強請れよ」

「ちいせえクリちんぽ、ビキビキに勃起させやがって♡自分でシコシコオ

ナってみるよ、美春」

「ほおら、でっけちんぽが美春のキツキツのチビまんこにぐちゅうう♡つて入っちゃうぞ？ 頑張っておまんこ締めないと子宮口までブチ抜くぞ、おい♡」

「ケツまんこもクパクパ♡ってしてんなあ。慌てなくてもちんちん入れてこちゅこちゅ気持ちよくしてやるから♡まずはべろちんぽでケツ穴ぐっずぐっずになるまで舐めまくってやるからな♡」

「う~~~~♡ う~~~~♡♡♡」

自分がベッドに入った後に始まる椿の卑猥な日課に、美春はすっかりぐっずぐずにされてしまっていた。最初は耳を塞いで終わるのを待っていたはずなのに、今では椿の声に合わせて自分でおまんこに指を突っ込み、ぐちゅぐちゅ♡とかき混ぜる始末だ。



「こんな：こんなはずじゃなかったのに……！」

一人の生活をゆつくり楽しむ予定だった。浮気した婚約者を忘れて、残りの貯金を使いながら今まででできなかったことを色々したいと思っていたのに。今では夜中のこのエッチな嫌がらせが頭から離れないのだ。

「んうゝゝゝ♡やあ：だめ、ダメなのにい♡♡」

美春は自分のクリトリスをぐちゅぐちゅと指でめちやくちやに擦る。婚約者とは品行方正でお手本のようなセックスしかしたことがなかった。激しい言葉も使わず、あまり喋らず、ただ上に乗られて腰を振られるのがセックスだと思っていたのに。

「ほら、俺の膝の上に乗れよ。下からおまんこ壊れるまでちんちんでばちゅばちゅ♡って突いてやつから♡」

「おちんちんペロペロするの上手だな、美春。いい子だなあ、美春う♡」

「お尻こちゅこちゅされながら、Gスポ掻きむしられるのたまんねーだろ？美春のまんこ、ハメ潮びゅーびゅーって噴き出してんぞ？♡」

「あ…椿い♡椿さあん♡」

あちらに声が漏れないよう、小さな声で名前を呼ぶ。

「もう、や、やだぁ♡」

こんな自分は知らない。いつのまにかこんなにエッチになってしまった自分が怖い。それに、椿の意図が分からず、頭が混乱してしまう。

「うええん。もうやだよぉ…。」

たった一回だけ挨拶をして、無理やりキスされたアラサー女。そんな女を、あのモテそうな椿が相手にするとは思えない。

「っう♡イクイクイクう♡♡」

前に女の子がしていたような下品な喘ぎ声をあげて、美春が絶頂する。は

あはあと息を整えていると、急激に虚しくなってくる。女性の声は聞こえないけれど、きつと女を抱いているに違いない。じゃないとあんなエッチなこととはできないはずだ。まるで毎日椿に抱かれているように感じていた美春は、その事実をまるで浮気のように感じてしまい、もう耐えられなくなっていた。

「もう…やだあ…。引越し…しよう。」

ぐちゃぐちゃに濡れた自分の指を見ながら、美春が小さく呟いた時。

ドンツツツ！！！！！！！

「ひっ！」

突然、椿の部屋から壁を激しく叩く音がして、美春は小さく悲鳴を上げて

縮こまる。荒々しく隣の家の扉が開く音がしたかと思うと、ドンドンと自分の部屋の扉が叩かれた。

「ひっ！」

美春は自分の足音が聞こえないように、ゆっくりと玄関へ進む。

「美春う、いるんだろ？」

「っ！」

低く不機嫌そうな恐ろしい声が聞こえてきて、悲鳴を上げそうになった美春は慌てて自分の口を塞ぐ。

「なあ、美春？お前が悪いんだぞ？俺みたいに明らかにヤバそうなやつにあーんなに可愛くちゅうするから♡そもそも見た目がタイプだったのに、気が強くてちょっと抜けてるとかどんだけエロイんだよ♡…俺なあ、頑張ったんだぞ？半年も手を出さずに待ってやったんだ」

「ひっ…！」

がちやがちやとドアノブが激しく揺れる。鍵をかけているので、開かないはずなのに、どうしてか背中を冷や汗が伝う。

「あはは♡俺がほかの女抱いてると思ってんの？馬鹿だなあ♡初日以外はオナホにずーっとザーメンぶちまけてたんだよ♡美春のエッチなおまんこ、ぐっちゃぐちゃにする妄想でザーメン毎晩ぶちまけてたの♡…なあ、ここ開けろよ。」

「ひい！」

ドンドンと扉を叩かれ、美春はその場に座り込んでしまう。

「はは！美春ちゃんのエッチな声も聞こえてんだけど♡あれってワザと？聞こえないようにって小さく声出してたつもりなのかもしれないけど、壁薄いんだから聞こえるに決まってんだろ、バカだなあ♡」

扉の向こうからカチャカチャという金属音がする。そしてガチャリとひと際大きな音が鳴ったかと思うと、回らないはずのドアノブがグリーンと一回転した。

「や！だめ！！」

急いで立ち上がった美春は慌ててドアノブを押さえ、もう少しくで開きそうになるドアを体全体で何とか押しとどめた。すると、外からクスクスと笑う声が聞こえてくる。

「みーはるる？ダメだって。もう諦めろ。俺に目を付けられた時点で逃げられはしないんだからよお。美春が自分からこの扉を開けるって言うんなら、優しくしてやるよ。…でも意地でも開けないって言うんなら、ちゃあんと分からせないとダメだよなあ？」

「ひっ…！」

「自分で開けてくれるなら、おまんこ優しく開いて俺のペロちんぽ、ちゅこちゅこ♡って出し入れしてやるよ♡可愛いおっぱいもやさしく揉み揉みして、乳首もちゅぽちゅぽ♡って可愛がってやる。おちんちんもゆうっくり中に入れて、恋人セックスみたいに甘やかしてやる♡…でも、開けないってんなら、潮吹きまくって声枯れるまでぐっちよぐちよにまんこ舐めまくるぞ？クリトリスも皮からはみ出るくらいにデカくなるまで歯でかみかみしてやっから♡ゴムなんかしないで直接美春のまんこ、俺のグロちんぽで子宮口までぶち抜いてやる。おほおほ♡言って謝っても許してやんねーぞ？子宮に直接、俺のザーメンびしゃびしゃかけて、中から俺の女に変えてやる♡」

「ひぁ…うう…♡」

怖いのに、椿の卑猥な言葉を聞いてまんこからトロトロと愛液が漏れ出

てしまう。

「やだあ……いやなのに……なんで、こんなっ！」

自分のまんこの入り口を押さえて、美春がポロポロと涙を流す。

「もう……許してえ……。ごめんなさい、私が、悪かったから……。男に捨てられた年増のくせに、キスなんかしてごめんなさいっ……。もう、いなくなるから、だからもう私のこと、変にしないでえ！」

そう言い切ると、ピタリと椿の声が止んだ。ドアを叩く音も、ドアノブを弄る音も消えている。

「良かった……。」

自分が無様に謝ったから、椿も気が済んだのだろう。そう判断した美春は、ぐずぐずと鼻を鳴らしながら玄関に背を向け、自分のベッドへ戻ろうとする。



「逆効果なんだよ、美春う♡」

「ひっ!!!!!!」

ニタリと笑った椿が美春の体に覆い被さった。

\* \* \* \* \*

ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡  
ゆッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡ぼちゅッ♡

「おッ♡おッ♡ひ、や、やめでえ♡」

「んっ♡美春のおまんこが俺のおちんちん離してくれねーんだろ？おまん

こきゅんきゅん♡させて喜んでるくせに嘘ついてるんじゃないーよ!」

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅツツ♡♡♡

「ひぐうう♡ん おくくくツ♡♡おく、おくだみえ、しょんなどこ、入らない♡♡」

「はは♡前の男の短小ちんぽじゃ子宮口まで届かなかったか?良かったなあ美春♡これからは、毎晩子宮に直接ザーメンぶっかけられるぞ?」

ぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅぶちゅううう♡♡♡

「ひぐうう♡♡腰、ぐりぐりしないでえ♡おまんこおかしい♡おかしくなってるからあ♡イグイグイグうくくくツ♡♡♡♡」

自分のベッドに押し倒され、足を開かされた美春は椿のバキバキに勃起したちんぽを受け入れていた。じたばたと暴れてみても、自分より遥かにガタイのいい椿に敵うはずもない。

「ひどい、ひどい♡こんな、の、ん、お！警察に、行って…っ」

美春が快楽に飲まれそうになる思考を何とか押しとどめて、キツと椿を睨みつける。しかし、椿はへらへらと笑って、体を近づけてきた。ぐう♡と椿のちんぽが美春のGスポットを押し上げ、「ん、おッッ♡♡」と野太い声を上げた美春の耳元で椿が低く囁く。

「はは♡何言ってるんだよ。美春も俺のせんずり聞いてオナってたじゃねえか！同罪だろ！」

「な、なんで！」

「だーかーら！さっきも言ったけど、聞こえてんだっつーの！『椿♡椿♡♡』ってきやんきやん泣きながらおまんこぐちゅぐちゅ弄りまくってる音がずーっと聞こえてんの。ばっかだなあ、美春は。ほんと、バカで、可愛くて、たまんねーよッ！♡♡」

ばちゅんツツツ♡♡♡♡♡

びゅるるるるるるるるるる♡♡♡♡♡びゅッ♡びゅるる♡♡ぶびゅうう♡

「ひあ！な、なんで、中に…出してっ！！」

「くう♡美春のまんこに種付け完了♡これでもう俺のおまんこ嫁なんだから、ぜってーほかの男のちんぽ啜え込むんじゃねーぞ？んなことしたら、そいつ殺すからなあ♡」

ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡ばちゅんツ♡

「あゝゝゝ♡♡あッゝゝゝ♡♡」

自分の精液でぐちゃぐちゃになったまんこで、またちんぽを扱き始めた椿は快感に喘ぐ美春を見下ろしながら笑った。

「あゝ♡めんどくせえ仕事だったけど、いいもんみつけた♡」

【元カレに電話しながらおまんこぐちよぐちよにされるおまけ】

「ほおら、ちゃんと自分で腰振れよお♡」

「ひぐうう♡」

あぐらをかく椿の上で両腕を頭に回しながらドスケベスクワットをさせられてゐる美春は、涙をにじませながら首を横に振る。

「やあ♡いやだあ♡もう、いや♡こんなの、わたしじゃな、いい♡いやだあ♡」

「いやだいやだつてガキみたいに泣いてるんじゃないやねーぞっ！」

ど  
ち  
ゆ  
ん  
ツ  
ツ  
ツ  
ツ  
♡  
♡  
♡  
♡  
♡

「お  
ご<sup>っ</sup>  
ツ  
!!!!  
!!!  
♡♡♡」

腰を掴まれ、そのままちんぽをねじ込まれる。目をトロトロに蕩けさせた

美春が甘く悲鳴を上げながら椿の体にぎゅう♡と抱き着いた。

「やあ♡こわ、こわいい♡こんなにやの知らない♡」

「…ほんとにかあ？処女じゃねーみたいだし、ほかの男ともヤッてたんだろ？」

「こんなエッチ、んう♡したことない♡初めて♡初めてなの♡」

「ふうん♡」

何かを思いついたように笑う椿が、美春を抱えたまま立ち上がる。

「おおお♡」

「おらおら♡足つかねーでちんぽで串刺しにされんのたまんねーだろ♡涎垂らして可愛く喘いでろ♡」

ぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅ♡♡

「おおお♡いぐいぐ♡またいぐ♡」

ふしゃあ♡と美春のまんこからハメ潮が漏れ、部屋の床を濡らしていく。それを気にせず、椿は美春のスマートフォンを見つけ出すと、アへ顔の美春の前に画面を持ってきて顔認証でロックを解除した。

「あはは♡美春のこおゝんなエッチなアへ顔でもロック解除できちゃったな♡」

ぐちゅちゅちゅちゅ♡♡♡ぼちゅん♡♡ぼちゅん♡♡ぼちゅん♡♡  
ぼちゅん♡♡ぼちゅん♡♡ぼちゅん♡♡ぼちゅん♡♡

「んぎい♡子宮、ごちゅごちゅしないでえ♡しゅごいのくるう♡くるからあ♡」

美春を下に降ろし、壁に手を付かせた椿は後ろから美春の尻が歪むほど激しく腰を叩きつける。ぶるぶると体を震わせ、まんこからびしゃびしゃ♡と様々な体液を吹き出す美春を後目に、椿はスマートフォンを操作して、元

カレと思われる男の連絡先を見つけ出す。

「美春う♡これ、元カレ？」

「っう♡」

「これだな♡」

きゆう♡と締まったまんこでそれを確信した椿は、そのままその男に電話を掛けた。

「いやあああ♡」

「はいはい、黙って気持ちよくなってる♡」

ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡

「いぐうううううううううう♡♡」

『…美春か？』

美春が絶頂するのと同時に、元婚約者への電話がつながる。懐かしく優し



い声に、美春は思わず涙ぐんでしまった。

「…何、今彼の前で、前の男、思い出してんだ、美春う！」

「ん、おっ~~~~♡♡♡」

『み、美春ッ！？』

獣のような美春の喘ぎ声を聞いて、元婚約者が慌て出す。

『美春、どうしたんだ！何かあったのか！おい、返事を！』

「おら、イケイケイケ♡俺のグロデカちゃんぽにまんこでいっぱいご奉仕して、子宮口でドロドロザーメンいっぱいゴクゴクしろ、美春♡」

ぶちゅんッ♡ぶちゅんッ♡ぶちゅんッ♡ぐちゅぐちゅっぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡♡♡

「おとおおッ♡♡まだいぐう♡死ぬ、死んじゃうう♡♡」

「ほら美春♡元カレにちゃんと見えよ♡もうお前のちんぽなんかじゃ満足

できませんって♡」

「そんなッ♡」

「言え♡」

ばちゅんッ♡♡グリグリグリいッ♡

「あッッッ♡子宮、ぐりぐりだめえ♡イグイグ♡またイグ♡椿さんのデカちんでおまんこほじくり回されてアクメするううう♡♡♡」

『み…はる…ッ!』

「おら♡また中に出すから、子宮口降ろせ♡おらおら♡イケイケイケイケ  
イケ♡♡♡くう♡」

ばびゅううううッ♡♡ふびゅふびゅ♡びゆるる♡ぶちゅう  
う♡♡♡

「おッッッッッッッ♡♡♡♡♡」

「くう♡美春のまんこ、たまんねえって、ほんと♡」

へこへこと腰を動かし、精液を全て美春の中に出し切った椿は涎を垂らして気絶した美春の体を片手で支え、電話の向こうの相手に話しかける。

「美春を捨てるなんてアホなことするなあ、お前。」

『…美春に手を出すな。お前が美春を誑かしたのか!!』

「おいおい。わけえ女に誑かされたお前が言うのか、それ？せいぜい美春のアクメ声聞いて勃起したちんぽ、若さが取り柄のバカ女に抜いてもらえよ。じゃあな♡」

『っ待て!!』

問答無用で通話を切ると、スマートフォンを放り投げ、椿が美春を抱き上げる。

「…かぁいいなあ美春。もう俺のもんだからな♡」